

「薩摩藩楽隊」(横浜開港資料館蔵)

日本の開国が進むにつれ多くの事件が起こります。1862年(文久二年)のイギリス商人リチャードソンが川崎大師を見学に行く途中に起きた不幸な「生麦事件」(横浜市鶴見区)、1863年(文久三年)のフランス士官カミュ殺害の「井土ヶ谷事件」(横浜市南区)、1864年(文久四年)のポールドウィンとバードが殺害された「鎌倉事件」などにより、横浜にはイギリス、フランスの軍隊が居留民保護のために、駐屯することになったようです。

「生麦事件」を契機におこった「薩英戦争」後、薩摩藩とイギリス軍が相手の実力を認めて手を結び、明治維新へと加速しました。

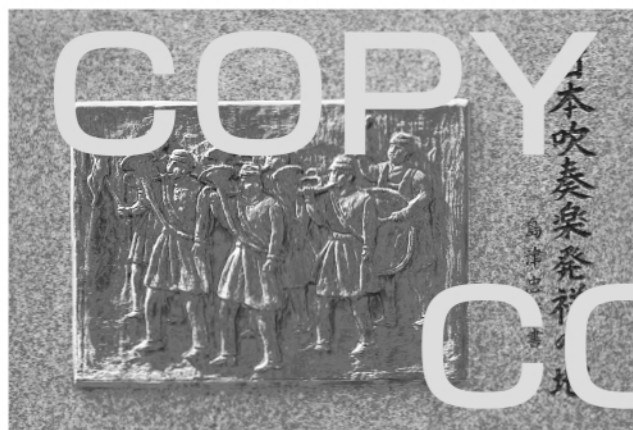
1866年(慶応二年)、鹿児島を訪れたイギリス艦隊ではパークス公使夫妻も来訪し親善行事が繰り広げられ、軍楽隊の演奏に接した薩摩藩士は「あれはよかもんじゃ!」と軍楽隊の必要性を感じました。

明治維新後、鼓笛隊経験者32名の薩摩藩士を横浜市中区の本牧山妙香寺でイギリス陸軍第10連隊第1大隊軍楽隊の隊長より指導を受けたのが「薩摩藩洋楽伝習生」で「日本の吹奏楽」の始まりです。この隊長が礼式曲「君が代」を作曲したジョン・W・フェントンです。

当初は楽譜の読み方、歩き方、和楽器や信号ラッパ等を使った練習でしたが、1870年7月(明治三年)に注文した楽器が届くと、フェントンは週4回、駐屯地から伝習生の寄宿先だった妙香寺に通い、熱心に指導を行いました。※1

この「薩摩藩楽隊」は連日連夜の練習の末、9月7日にはフェントンの指揮で山手公園音楽堂において初の演奏会を開催します。これには第1大隊軍楽隊も出演しました。※2

この頃の「薩摩藩楽隊」の様子は、同年東京の越中島での天覧閱兵式に出演したときの様子を、明治の絵師「三代広重」が東京三十六景「深川越中島」の版画に描いています。

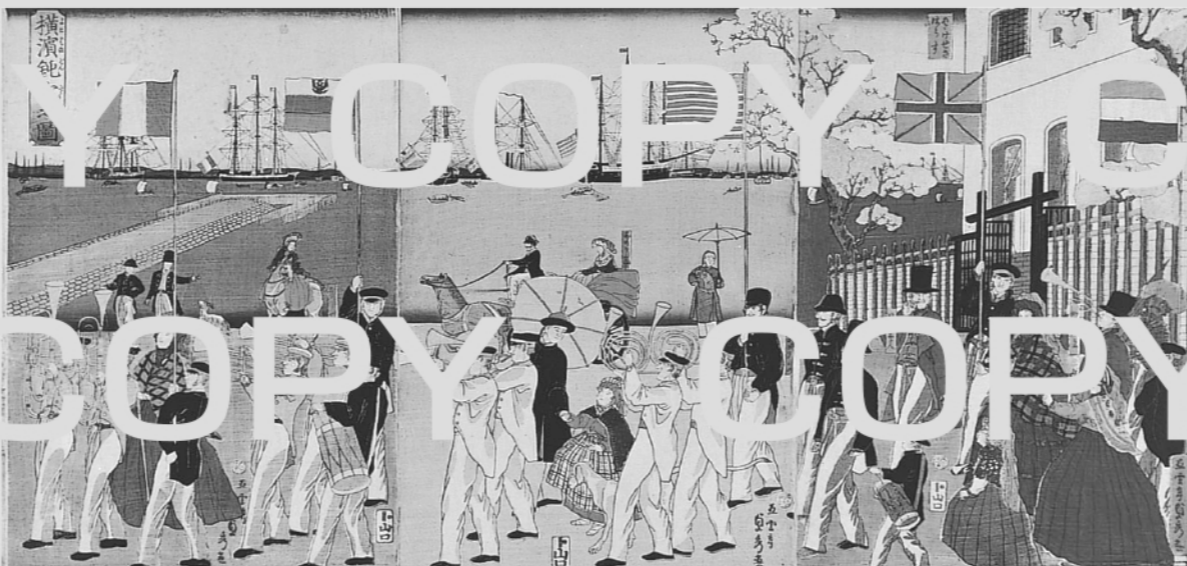


妙香寺にある「日本吹奏楽発祥の地」の碑

『横浜はじめて 物語—吹奏楽』

今年、開港167周年を迎えた港町、横浜。1853年(嘉永年6年)ペリー提督率いる艦隊に乗組んで来訪した軍楽隊により、我が国に「西洋音楽」が紹介されました。

現在のやマーチングに始まる「吹奏楽」もこの一つです。この吹奏楽が、その後の日本の文化に大きな影響を与えます。



「横浜鈍宅之図」(横浜開港資料館蔵)

横浜でも第10連隊の他にも第20連隊軍楽隊によって、山手公園音楽堂や海岸通り(現在の元町付近)において週に1~2回の行進演奏や演奏会が行われ、マーチやカドリール、ギャロップなどの音楽で人々を楽しませていました。彼らは、イギリス人としての凛々しさにあふれ、長身の身を赤い軍服で包んでいたことから「赤隊」と呼ばれていたそうです。

フェントンから指導を受けた「薩摩藩楽隊」は兵部省の創設により、1871年(明治四年)海軍軍楽隊へと発展します。翌年の1872年(明治五年)には海軍省・陸軍省の創設により分立します。陸軍軍楽隊となって薩摩洋楽伝習生達は海軍軍楽長 ※3 や陸軍軍楽長 ※4 をはじめとして要職に就く指導の立場になっていきました。

フェントンには、悲しい出来事がありました。妻、アニー・マリアが1871年5月、この横浜で40年の生涯を終えるのです。今も眠る「横浜外国人墓地」の墓碑には「ジョン・W・フェントンの愛する妻アニー・マリア」と深く彫られています。

フェントンは第10連隊撤兵の際にも、横浜に留まることを決意し、海軍軍楽隊お雇い教師として指導にあたることを選びました。これは妻を一人異郷の地に眠らせることが忍びなかったのではなかろうかとも言われています。

フェントンは1877年(明治十年)に日本を離れますが、彼の残した多くの輝かしい業績は、日本の軍楽隊の発展に寄与したばかりでなく、各方面に吹奏楽が広がる契機となり、後に「市中バンド」と呼ばれる学校や企業などの民間バンド創設へと波及し、今日の「吹奏楽」の隆盛の基盤となったのです。

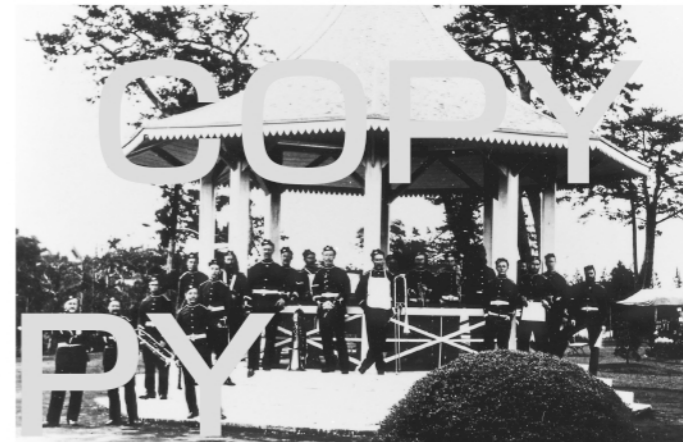
現在でも「君が代寺」として有名な「薩摩藩洋楽伝習生」の寄宿舎であり練習場所であった妙香寺 ※5 には「日本吹奏楽発祥の地」の記念碑が建っています。

第二次世界大戦後、また大きな転機が訪れます。神奈川県警察音楽隊はアメリカ陸軍から、横浜の学生たちはアメリカ海兵隊から指導を受け「私たちの横浜」のバンドがアメリカン・スタイルで本格的な活動を始めます。これが現在ある「日本のマーチング」の原点となります。

このような歴史は、今日でも横浜を中心とした学校・一般を問わず、数多くの吹奏楽に息づいていて、その裾野を全国へと広がっています。その数は約1万3千団体、約83万人(全日本吹奏楽連盟調べ)にも及びます。この他にも卒業生等の経験者を加えると、およそ日本国民の15人に1人は経験者ということになり、マーチングバンド等を含めると10人に1人は何らかの形で「私たちの横浜」とつながっていることになるのです。

- ※1 英字紙「Far East」から
- ※2 英字紙「Young Japan」から
- ※3 海軍軍楽長 中村祐庸等
- ※4 陸軍軍楽長 四元義豊等
- ※5 横浜市中区妙香寺台八番地

参考資料
 ・堀内敬三著『音楽五十年史』
 鱒書房(昭和十七年)
 ・『海軍軍楽隊—洋楽史の原点—』
 楽水会編 国書刊行会(昭和五十九年)
 協力:横浜開港資料館、楽水会、本牧山 妙香寺
 監修:公益社団法人 日本吹奏楽指導者協会



「山手公園音楽堂の第10連隊第1大隊軍楽隊」(横浜開港資料館蔵)



「明治16年制定の海軍軍楽隊礼服」(楽水会) 前列左から2人目が楽長、3人目が楽次長